

二〇二四年一月二日

初みくじ箱の底より吉拾ふ  
二羽の鳩連鎖反応して潜る  
風捉へみるみる天へ凧  
大小の欠片となりぬ鏡割  
唐門に瑞枝差し伸ぶ冬芽かな  
浅春の庭へ竜宮門潜る  
病院食鍋焼うどん切れぎれに  
残照の藍の残りし寒夕焼

二〇二四年一月一日

リメイクと知らず旨いとお節食ぶ  
思ひ出のちゃんちゃんこ着て母偲ぶ  
大うつぱり煤びかりせる冬館  
玻璃透けて日の斑ゆらめく冬座敷  
旅籠屋にひびく寂声謡初  
万両が見てよ見てよと躰口  
寒紅の地唄の声のよどみなく  
父母の眠る大宰府梅ふふむ

二〇二四年一月一日

初稽古宝づくしの帯締めて  
路地裏のバーのドアにも注連飾  
大どんど果てたるあとのふと寂し  
大仏の螺髪に遊ぶ寒雀  
凍つる夜や圧力釜が笛を吹く  
絶食の明けてすずしろだけの粥  
被災地の復興祈る宮焚火

なつき 康子 かえる 豊実 うつぎ あひる 素秀 はく子  
なつき 康子 澄子 澄子 かえる むべ むべ 澄子 山椒  
小袖 せいじ 明日香 智恵子 千鶴 素秀 なつき

二〇二四年一月九日

伊勢海老の跳ねだす茶碗初点前  
飴色に大根透けるおでん酒  
鶴と亀飾る御苑や初句会  
石仏の目鼻隠るる毛糸帽  
沼島見ゆ沖の朝凧淑気満つ  
菰巻の飾り結びに松祝ふ

二〇二四年一月八日

松過ぎて体重計を疑ひぬ  
餅焼けば風神雷神猛るごと  
ラガーメン凱歌の頬に絆創膏  
老二人暮らしのおでん明日もまた  
破れ障子洩るる夕日に力なし  
卒寿翁意気軒高と初謡

二〇二四年一月七日

気合入れ創るお節や孫に嫁  
セーターの虫喰いに刺す花刺繍  
ほつれ髪姉に直さる春着の子

二〇二四年一月六日

線描のごとき秀枝や枯木立  
見上ぐれば蠟梅に透く御空かな  
餅花の路地パトカーの音馳せる  
植木屋も農夫も給仕大根焚

なつき やよい 康子 ぽんこ 千鶴 むべ  
みきえ 山椒 素秀 やよい 康子 千鶴  
そうけい あひる かえる  
むべ もとこ あられ うつぎ

毎日句会みのる選・二〇二四年一月四日